

自悠新聞

〒980-6101

仙台市青葉区中央1-3-1 アエル1階

発行所 丸善仙台出版サービスセンター

平成22年(2010年)4月 No.82

印刷 笹氣出版印刷(株)

☎022-264-0151 fax022-264-0112

k.ishimori@nifty.com

編集長 石森浩一

*葛飾北斎生誕二五〇年記念出版

フランソア プラス著 『江戸の小雀と北斎爺さん』 日本語版完成

水野悦子・佐藤和美

葛飾北斎生誕二五〇年の今年、フランス人作家による北斎の著書『江戸の小雀と北斎爺さん』(原題 Le vieux fou de dessin)を翻訳自費出版しました。

作家のフランソア・プラス氏は現代フランス文学界を代表する作家であり、同時に挿絵画家でもあります。この本は、2001年にフランスで出版され、2004年には英訳され今なお多くの読者を獲得しています。にもかかわらず日本語訳のないことが惜しまれていました。それがようやく北斎にとって特別なこの年に翻訳出版されたのです。

私たち翻訳者から「この本との出会いとエピソード」をお話したいと思います。

ロサンゼルス市の町外れ、小さな美術館の書籍コーナーで初めてこの本を見た時の事は今でもはっきりと思い出すことが

できます。「わっ、こんなところに日本の本がある」と思わず手に取り、なんとも魅力的な挿絵に惹かれ、作者が誰とも確認せず、良いものを見つけたという思いだけで日本に持ち帰りました。後に原作がフランス人であり挿絵も彼が描いていると知ったときには目を疑いました。それは多分、私たちの中に「外国人が日本の風物を日本人から見ると何の違和感もなく描けることなんてあり得ない」という妙な先入観があったからだと思います。そして今にして思えば、それが見事に裏切られたときの「奇妙なうれしさ」が長くこの本にかかわることになった大きな理由かもしれません。

最初にあつた何故という疑問は、今度は何が書かれていいるのだろうかという興味になり、少しずつ翻訳を進めていくうちに、この興味が驚きに変わっていききました。それは物語の面白さは勿論

丸善仙台アエル店・金港堂書店・八文字屋書店・紀伊国屋書店にて好評発売中!
1,500円+税



一フランス人である彼が持つ北斎への理解の深さが、信じたがたかったからです。この人は日本人以上に北斎を理解している」という事実。いやそんなはずではない!どこかにきつと誤解や間違いがあるに違いないと、意地になってこちらもたくさん資料を買い込み、何冊もの本を調べ検証してみるのが、ほとんど間違いがないのです。たまに、歴史的事実と異なる場所を見つけたとしても、結局、諸説ある一説とか、作者が物語の構成上多少の変更を余儀なくされているところがあただけでした。一通り翻訳し終わったときに私たちは、よく理解していなかった北斎の姿を外国人に教わった恥かしさもさることながら、改めて北斎の偉大さに頭が下がる思いでした。それは次第に日本の誇りである画家北斎のこともっと子供たちに伝えなくてはという意思が変わっていった

のです。この本を手にしてから5年後の今年、『江戸の小雀と北斎爺さん』と題して丸善仙台出版サービスセンターから自費出版することが出来ました。とてもとても美しい本に仕上がりました。どうか手にとって生き生きとした挿絵を楽しんでください。そして『漫画』の命名者である北斎がこんなにもすばらしい仕事をし、九〇年の生涯を見事に全うし、今の私たちにたくさんの宝物を残したのだということも一人でも多くの方に知って欲しいと心から願っています。(翻訳者記)

M マルエム春秋

四年九カ月前の平成十七年に先生は、がんを告知された。大腸がんの第IV期。その後、肺にも転移、闘病生活が続いた。大学教授としての現役時代は地盤研究者として二三年間に亘って日本海中部地震における液化化被害の戸別調査をし、二六〇ヶ所の宅地地盤のボーリング調査を自費も加えて行った。そのデータは他に類を見ない貴重な実見記録であるばかりでなく、今後予想される大地震の被害防止対策工を提案するものでもあった。

遺作として残された自費出版本『患者からみたがん医療の実態』は、一五四冊もの医学専門書や哲学書などを読破し書き上げた力作である。「世のために役立つ研究をし、本に残す」という学者としての使命感が、第IV期ががん患者であった先生の長期延命を支えていた。「自分がどのようにがんに向き合い死を迎えるか」「がん患者はがんに無知であってはならない」と自身の身を削って、この本をがんで悩む人たちに捧げたのである。三月三十日、先生は本に書かれたように安らかに筆を擱かれた。

『アメリカ滞在記』を書き終えて

仙台市 多田雅史

前面がガラス張りになつていて、そこから差し込む日の光がくつきりとした境界線をもって空港の搭乗口の待合の床に落ちている。人々はその日の光を避けるように待合のカウチに腰掛けています。搭乗はもう始まっているが、非常に時間がかかっている。手荷物を提げた中年の白人女性が乗り込み口の職員に言われて仕方なさそうに手に持っていたペットボトルの口を閉めて職員に手渡す。その後ろにも延々と人の列が続き、まだまだ搭乗はかかりそうだ。

何の変哲もない平凡な黒のスーツを着た、三代前半くらいの日本人が、立ち上がった僕に近寄ってきて、ちよつと話を聞いてもいいですか、と話しかけてきた。僕が諒解すると、彼はこれからあの飛行機に乗るのであるかと訊いてきた。そうだと僕が答えると、彼は、どう思いますか？と更に尋ねてきた。「出来れば乗りたくはないけれど、仕方ないですね」と僕は答えた。彼は同意するように少し苦笑したように僕には見えた。彼は僕がこの飛行機に乗る理由を訊いてきた。「留学ですか？」「アメリカの大学にですか？」「ええ」「なんて大学ですか？」「パーデュという大学です」「ああ、バスケットボールの強い」。僕はそれで初めて、今から僕がこの飛行機に乗って留学しようとしている大学が学生のバスケットボールの強豪であったことを知った。

9/11の映像を僕はテレビで見た。夜の九時ぐらいだったと思う。そのときは僕はこの出来事がこれから、僕が人生の大半を過ごすであろうこの二十一世紀という世紀を象徴する出来事だとは知らなかった。ときどき僕は、まさに今から死ぬという瞬間に僕は何を考えるだろうか、ということを考える。おそらく、いや間違いない、僕は、ああこれでも何も伝えられなくなるな、ということをおもう。そして、高校生のように留学した先で見ると、カンボジアの内戦の犠牲者の姿を思い出すと思う。あれを作り出したポルポトレジームは、僕がそれを見たときよりも二十年前のことなのだ。僕があれを見たのは、一九九六年の暮れで、まだポルポトが生きていた。僕がここで「あれ」とか「あれら」という代名詞で指したのは、僕が目撃したタイとの国境付近の

カンボジアの状況のことではない。そこにいた人間のことである。もつとその時の僕の感覚を正確に書くと、二足歩行の人間らしき姿かたちの、その中を徘徊している生き物のことである。それは、僕がそれまでの十七年の人生の中で見てきた何物にも当てはまらなかった。僕にはそれが見えなかった。そこにいるのに、目から入ってくる視覚情報として認識できなかった。

日本に帰ってきてから、僕はそれを「あれ」という代名詞でしか認識できない自分に気づいた。ショックだった。状況から考えて、あれはどう考えてもホモサピエンスなのだ。それから僕は、どうやったらあれら人間に似た姿かたちの生き物を「あの人たち」とか「彼ら」といった代名詞に昇格できるだろうか、ということをおもうようになった。

『アメリカ滞在記』
著者：多田雅史
文庫判
定価 500円
丸善仙台アエル店
自費出版コーナー
にて販売中

あれからももう少しで五年経つ。あれから学んだことは、自分の体験は自分で語るしかない、ということに尽きると思う。日本に帰ってきてから、僕は、僕があそこで見えたものを解つてくれる人間が自分の周りにまったくいないという事に気づいた。親だつて、例え言ったからといって理解してくれるか怪しいものだ。じゃあ、僕が見てきたものはいったいなんだ？ たんだらう？僕は黙る、という道を選んだ。黙れば、誰も、気づかない。そういう風にして僕は内側から腐っていった。

アメリカから帰ってきて、僕は、このことを越さなければ、と思った。そして、書くという方法を選んだ。それが今、こうして本という形になつて、僕は心の底からほつとしていく。



丸善仙台アエル店
営業時間
10:00~21:00
日曜祝日は20:00迄

丸善の自費出版

あなたの本を創ってみませんか！
丸善は書店としての経験をいかして自費出版本制作のお手伝いをさせていただいております。お気軽にご相談下さい。随時承っております。—お見積り無料—
☎022-264-0151 携帯 090-5184-0532 (石森)

NPO法人
日本自費出版ネットワーク認定
自費出版
アババ
認定第 0014 号
石森浩一